

義経が駆けた道

辻 憲男 (文学部教授)

京の五条の橋の上、鬼の弁慶のナギナタを“ここと思えばまたあちら”とかわした牛若丸は、かつての少年少女のあこがれのヒーローだった。壇ノ浦の戦いの八艘飛び（はっそうとび=約6メートル）も、身軽な早わざの名場面だった。源義経は美少年でなければならない。ただし『平家物語』にはなんだか、背が小さく、色白で出っ歯だったとある。敵の平家の側の悪口とはいえ、英雄の実像は絵本や物語とは少々違っていただいようだ。

前年に都落ちした平家が、再び勢いを盛り返して、須磨の一ノ谷から生田の森まで陣を張った。義経軍は背後のひよどり越えから奇襲をかけた。1184年の雪の2月、まず二頭の馬を源氏と平家に見立てて勝ちを占った。崖から追い落とすと、源氏の白の馬だけが途中の壇にとどまった。力を得た義経は馬に乗って駆け下りた。ついで一人の武者が先陣を切った。「あれを討たすな、われに続け」と号令一下、精鋭七十余騎がどっと急坂をくだった。総勢三千余騎の音と声が山にこだました。平家軍は驚いてたちまち敗走した。

義経は転戦の間も、白拍子（しらびょうし）らを伴った。天下一の歌舞の上手・静（しずか）は、義経を愛したために辛酸をなめた。義経は兄頼朝に追われ奥州平泉に落ちた。静はとらえられて鎌倉の鶴岡八幡宮で舞を舞った。頼朝の猛妻・北条政子できえも、愛する人を思う静の女心を深くあわれんだ。



史跡・鶴越の碑から高取山、須磨方面。神戸電鉄鶴越駅下車。
静の舞は義経記（ぎけいき）、吾妻鏡（あすまかがみ）の名場面。